別紙様式第２号（表面）　　（別紙可）

サバティカル期間における研究経過・成果報告書

2023年5月26日

国立大学法人茨城大学長　　殿

所属・職名　　教育学部　准教授

氏　　名　　田原 敬

下記のとおり、サバティカル期間が満了しましたので、研究経過・成果等を提出いたします。

サバティカル制度を利用した期間	2022年4月1日　～　2023年3月31日

①研究経過について（利用期間を月単位などに区分して、具体的な研究経過を記入して下さい。）	７月までは国内におり，８月以降はデンマークに渡航して研究を行った。具体的な内容は下記の通りである。 ・４月～７月：研究１及び研究２を実施するための先行研究の調査を国内にて行った。また，国内で揃えることのできる備品などについても準備を行った。 ・８月～９月：引き続き先行研究の調査を行ったと同時に，デンマーク工科大学にて実施されているListening effortの評価法について学んだ。 ・10月～12月：児童生徒のListening Effortを軽減するための支援方法に関する実験を実施した。具体的には雑音下で文章を聴取した際の瞳孔径変化を指標として，どのような支援方法が効果的であるかという点について検討した。 ・１月～３月：日常に近い場面で児童生徒のListening effortを計測することが可能な方法について，様々な基礎実験を実施しその可能性を探った。
②研究成果について（目標の達成状況及び研究成果の公表予定について記入して下さい。）	サバティカル制度を申請した時点では，児童生徒に適応するための評価法を開発し，現地の子どもを対象に実験を実施することで開発した評価法の妥当性及び信頼性について検討すること（研究１：児童生徒におけるListening Effortの評価法の開発），その後児童生徒用におけるListening Effortの軽減につながる具体的な支援方法を提案し，先に開発した評価法を用いてその効果について検討を行うこと（研究２：児童生徒のListening Effortを軽減するための支援方法の検討）を予定していた。しかし先行研究の調査を勧めたり，デンマーク工科大学での実施例について学んだりする中で，すでに児童生徒を対象とした評価法（研究１）が確立されつつあるものの，それらの評価法は実験室でのみ実施可能であり，日常場面でのListening effortを捉える手段がないという新たな課題を見出した。そこで，研究２は予定通り実施し，研究１については日常場面でのListening effortを捉える方法を開発するという方向に修正を行った。 研究２に関してはすでに実験を終えており，2023年度中に学会発表や学会雑誌への投稿を行うことを予定している。 研究１に関しては，瞬きが日常場面でのListening effortを捉える指標になり得ることを発見できたものの，まだ予備実験や基礎実験の段階に留まっている。今後も引き続き研究を続け，これまでに検討してきた実験デザインを聴覚障害児者に適応しながら，日常場面でのListening effortについて検討を続ける。 研究１及び研究２のみでなく，渡航前や渡航後に実施した先行研究の調査についてもある程度整理ができているため，スコーピングレビューとして国際誌への投稿を計画している。 上記の一連の研究成果に関しては，学会発表や論文投稿のみではなく，聴覚障害児教育の関係者や言語聴覚士を対象とした研修会などでも広く公表することを計画している。